

氏 名	おお 浦 まこと 大 浦 真
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文 博 第 421 号
学位授与の日付	平 成 20 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	文 学 研 究 科 行 動 文 化 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	日 本 語 の 「 こ と が あ る 」 構 文 と テ イ ル 形

論文調査委員 (主 査) 教 授 田 窪 行 則 教 授 吉 田 豊 教 授 吉 田 和 彦

論 文 内 容 の 要 旨

本論文では、動詞に「ことがある」が後続する形式とテイル形との比較を行う。前者は動詞の基本形「する」に後続し「することがある」という形式で可能性や反復の意味を持ち、タ形「した」に後続し「したことがある」という形式で経験や完了の意味を持つ。それに対して、後者は一般的に進行や結果状態を表す用法を持つが、それとは別に反復や完了の意味も持つ。本論文では、似たような意味を持つとされる「することがある」と反復のテイル形との間の意味の差異、および、「したことがある」と完了のテイル形との間の意味の差異を述べ、その上で、二つの「ことがある」構文が共通して持っている性質と反復と完了のテイル形が共通して持っている性質を明らかにする。

本論文では、意味の分析を明示的に行うために Montague 以来の形式意味論の立場に立って議論を行う。この議論を行う上で、時間軸の上である時間の幅を持った時間を考え、インターバルという概念を導入し、このインターバルをいくつかの種類に分類することにより、「ことがある」構文の用法、および、反復や完了の用法だけではなく、テイル形の用法一般の説明を行う。

本論文で対象とするものは以下のような例である。

(1) a. この路線のバスはよく遅れることがある/遅れている。

b. 健はこれまでに三度選挙に出たことがある/出ている。

(1a) では、「遅れることがある」であっても、「遅れている」であっても、ともに反復や繰り返しの意味を持ち、両者の間に大きな意味の違いは感じられない。また、(1b) でも、「出たことがある」であっても、「出ている」であっても、ともに過去の経験や完了の意味を持ち、両者の間に大きな意味の違いは感じられない。

ある文の意味を考える際には、その文が記述している出来事が実際に起きた時点、出来事時と、その文が実際に発話された時点、発話時とを考慮し、その両者の関係について考える必要がある。これまでの研究では、「したことがある」と完了のテイル形の差異については、出来事時と発話時との間の関係の差異についての議論がある。つまり、「したことがある」構文はそれが表す出来事が単に過去の出来事であるだけでなく、その影響が現在まで残っていないのに対して、完了の意味を表すテイル形には、そのような制限はないという議論である。論者も基本的にはこの考えに従う。しかし、それに対して、「することがある」と反復のテイル形の差異については、これまであまり議論されてこなかった。実際、「することがある」であっても反復のテイル形であっても出来事時は発話時と一致する。したがって、「したことがある」と完了のテイル形との間にある出来事時と発話時の関係の差異は「することがある」と反復のテイル形の間には存在しない。しかし、「することがある」と反復のテイル形との間には、本質的な差異が存在する。前者は「こと」を含むコト節が統語的にも意味的にも一つのまとまりとなり、コト節が表す出来事が一つの出来事として捉えられるのに対して、後者のテイル形はそのような構造を持っていないという差異がある。これにより、副詞などで出来事の頻度や回数を計量する際に、「したことがある」構文では、コト節が表すひとまとまりの出来事が計量されるが、反復のテイル形では、テイル形が表す出来事そのものが計

量されることになる。

これまでの先行研究において、「したことがある」と完了のテイル形の間、および、「することがある」と反復のテイル形の間、に共通して存在する差異については議論されてこなかった。しかし、この「することがある」と反復のテイル形との間に存在する差異は、「したことがある」と完了のテイル形にも存在する。本論文では、「ことがある」構文では、コト節の表す出来事が一つの出来事として捉えられ、反復、および、完了のテイル形では、そのようなことはないということを主張する。

このことは、以下の例によって分かる。

(2) a. 昨年この洞窟で多くの人が死んだことがある。

b. 昨年この洞窟で多くの人が死んでいる。

(3) a. 健は毎日 3 時間勉強することがある。

b. 健は毎日 3 時間勉強している。

(2) の「したことがある」の例は、「一度に同時に多くの人が死んだ」という意味になるが、テイル形の例はそのような意味にはならず、「昨年一年間で何度も人が死んだ」という意味になる。(3) の「することがある」の例も、「(一年に一回、ある期間だけ) 毎日 3 時間勉強する」という意味になるが、テイル形の例は、「3 時間勉強する」ということが毎日起こることになる。それぞれ「ことがある」構文の例では、「この洞窟で多くの人が死んだ」、もしくは、「毎日 3 時間勉強する」が一つのまとまりの出来事として機能し、全体として一回の出来事を表すことになる。それに対して、テイル形の例では、「多く」が人の数を計量し、その結果、「死ぬ」という出来事の数を集量することになり、また、「毎日」が「勉強する」という出来事の頻度を計量することになる。

このことを意味論の立場から表すため、本論文では、これまでの形式意味論の枠組の中で動詞のテンスやアスペクトを表すために用いられてきた「時間のインターバル」の概念を用いる。この時間のインターバルとは、時間軸上である時間の幅を表すもので、主に英語の進行形や日本語のテイル形の意味を明示的に表示するために用いられてきた。さらに、本論文では、このインターバルの中に新たに「単数のインターバル」と「複数のインターバル」という概念を導入する。インターバルは、動詞の表す出来事に対応するが、通常、一つのインターバルは、一回の出来事に対応する。それに対して本論文では、インターバルの集合を考え、それを一つのインターバルとすることにより、複数回の出来事を表すことにする。前者を「単数のインターバル」と呼び、後者を「複数のインターバル」と呼ぶ。後者の複数のインターバルは、複数回の出来事に対応する。「ことがある」構文は、その意味表示に単数のインターバルを用いることにより、コト節のひとまとまりの出来事を表し、テイル形は、その意味表示に複数のインターバルを用いることにより、複数回の出来事も表すことができるという違いがあることを主張する。

また、本論文では、反復、および、完了のテイル形だけではなく、進行中の状態を表すテイル形や結果状態を表すテイル形の意味論についても考察を行い、テイル形は、質量名詞と同様の性質を持っているということを主張する。つまり、「水」や「金」などの質量名詞は、そのものを複数組み合わせてもそのもののままである。(水を二つ合わせても水のままである。) この性質を累積性と呼ぶ。また、質料名詞は、そのものの部分を取ってもそのもののままである。(水の部分を取っても水のままである。) この性質を分配性と呼ぶ。本論文では、テイル形が成り立つインターバルを考えると、進行中、および、結果状態のテイル形もこの累積性と分配性という性質を持っているということが言え、テイル形は質料名詞的な性質を持っているということを主張する。

このことを形式化するために本論文では、Link が導入した質料名詞の意味論をテイル形の意味論にも適用し、テイル形が質料名詞的な性質を持っていることを説明する。特に Link の導入した「個体的な和」と「素材的な和」という概念を元にして、本論文では、「個体的インターバル」と「素材的インターバル」という概念を新たに導入する。これは、前者は、一つの個体としてその内部を考えることのできないインターバルであり、後者は、素材として捉えることにより、その内部を考えることができるインターバルである。その上で、上述の複数のインターバルとこの素材的インターバルを用いてテイル形の意味表示を与える。具体的には、テイル形がその外延として持っているインターバルは複数のインターバルであり、かつ、素材的インターバルであると考えられる。これを用いて、進行中、結果状態、完了、反復といったテイル形の各用法を説

明し、テイル形の質料量名詞的な性質を導き出す。

進行中のテイル形、および、結果状態のテイル形において、その質量名詞的な性質は、素材的インターバルによって導き出すことができ、反復のテイル形と完了のテイル形の出来事を直接計量できる性質は、複数のインターバルから導き出すことができる。また、基本形/タ形とテイル形の区別についてもこの個体的インターバルと素材的インターバルという概念から説明できるということを主張する。

さらに、「ことがある」構文に関しては、単数のインターバルで考えることにより、そのコト節がひとまとまりになっているということを表すが、その意味表示より、「したことがある」構文は、その動作そのものが結果も含めて過去の出来事でなければならないということを表して、完了のテイル形は、動作そのものは、現在まで続いても続いていなくてもいいことを表しているということが導き出せるということを主張する。また、「ことがある」構文が「することがあった」や「したことがあった」という形式になった場合も含めて、コト節の出来事時と主節の出来事時の関係がどのようになっているかについて考察を行い、意味が似ていると考えられる「したことがある」と「することがあった」について、コト節の参照時に関する意味の違いが存在することを示す。

論文審査の結果の要旨

本論文は現代日本語の～テイルと～（ル/タ）コトガアルという形式を比較対照し、形式意味論により記述したものである。両者は類似した解釈を持つ。たとえば、「この路線のバスはよく {遅れることがある/遅れている。}」では「遅れることがある」であっても「遅れている」であっても、ともに反復や繰り返しの意味を持つ。また「健はこれまでに三度選挙に出たことがある/出ている。」では、「出たことがある」であっても、「出ている」であっても、ともに過去の経験や完了の意味を持つ。

論者は、「昨年この洞窟で多くの人が {死んだことがある/死んでいる}」「健は毎日3時間 {勉強することがある/勉強している}」のような例を観察し、「したことがある」と「している」の違いは、前者が一回の出来事を表しているのに対し、テイル形の例は複数の出来事を表すことが可能であると一般化している。「死んだことがある」の例では「一度に同時に多くの人が死んだ」という意味になる、テイル形の例はそのような意味にはならず、「昨年一年間で何度も人が死んだ」という意味になる。また、「勉強することがある」の例は「(一年に一回、ある期間だけ) 毎日3時間勉強する」という意味になるのに対し、テイル形の例は、「3時間勉強する」ということが毎日起こることになる。

このことを形式意味論の立場から表すため、論者は、従来形式意味論の枠組の中で動詞のテンスやアスペクトを表すために用いられてきた「時間のインターバル」の概念を用いる。時間のインターバルとは、時間軸上である時間の幅を表すものである。論者はこのインターバルの中に新たに「単数のインターバル」と「複数のインターバル」という概念を導入する。インターバルには動詞の表す出来事が対応し、通常、一つのインターバルは一回の出来事に対応する。論者はさらにインターバルの集合を考え、それを一つのインターバルとすることにより、複数回（一回およびそれ以上）の出来事を表すことを提案する。ここで一回の出来事に対応するインターバルを「単数のインターバル」と呼び、複数回の出来事に対応するインターバルを「複数のインターバル」と呼ぶと、「ことがある」構文は、その意味表示に単数のインターバルが用いられてひとまとまりの出来事を表し、テイル形は、その意味表示に複数のインターバルが用いられ、複数回の出来事をも表すことができるという違いがあることを主張する。

さらに論者はテイル形の反復、および、完了の用法に加えて、進行中の状態や結果状態を表す用法の意味論についても考察を行い、テイル形は、質料名詞と同様の性質を持っているという注目すべき主張をしている。たとえば、「水」や「金」などの質料名詞は、そのものを複数組み合わせてもそのもののままである（二つの入れ物に入った水を合わせても水のままである）。この性質を累積性と呼ぶ。また、質料名詞は、そのものの部分を取ってもそのもののままである（水の部分を取っても水のままである）。この性質を分配性と呼ぶ。テイル形が成り立つインターバルを考えると、進行中、および、結果状態のテイル形もこの累積性と分配性という性質を持っているということが言え、テイル形は質量名詞的な性質を持っているということを論者は主張する。

論者はLinkが導入した質料名詞の意味論をテイル形の意味論にも適用し、テイル形が質料名詞的な性質を持っているこ

とを示す。特にLinkの導入した「個体的な和」と「素材的な和」という概念を元にして、「個体的インターバル」と「素材的インターバル」という概念を新たに導入する。前者は、一つの個体としてその内部を考えることのできないインターバルであり、後者は、素材として捉えることにより、その内部を考えることができるインターバルである。その上で、上述の複数のインターバルとこの素材的インターバルを用いてテイル形の意味表示を与える。具体的には、テイル形がその外延として持っているインターバルは複数のインターバルであり、かつ、素材的インターバルであると考え。これを用いて、進行中、結果状態、完了、反復といったテイル形の各用法を説明し、テイル形の質料名詞的な性質を導き出すことに成功している。

進行中のテイル形、および、結果状態のテイル形において、その質料名詞的な性質は、素材的インターバルによって導き出すことができ、反復のテイル形と完了のテイル形の出来事が直接計量できるという性質は、複数のインターバルから導き出すことができることを示している。

以上のように本論文は、綿密な観察に基づいた現象の記述により新しい事実を掘り起こすと同時に、形式意味論による厳密な形式装置により日本語のテイル形とコトガアル形の違いを非常に明示的に取り出している。しかし、欠点がないわけではない。本論文は、テイル形とコトガアル形という二組の形式の意味論的違いを扱っているが、問題となっている解釈のうち計量化が問題となるものは言語表現のデフォルトでの解釈を表しているだけであり、意味論的な違いとして扱うのは適切性を欠く。しかし、これらは論者の主張自体に影響を与えるものではなく、出版の際に十分訂正し、補うことができるものである。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2008年1月21日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。